《質》の大転換

《論点》

◆　これからの地球環境はどのようになるか・・？　　国際協調・国家間対立はどのようになるか・・？　　新型ウイルスなど未知の脅威に人類は対抗できるか・・？　　こうした《大きな問い》を意識しながらも，これからの日本の在り方，教育の在り方について，どのように捉え，どのように考え方と実践方向を見定めれば良いのか・・という，《実際的な課題》について考えを巡らしてみると，世界・社会の在り方自体が大きな変容を遂げつつある今，日本型社会が積み重ねてきた《日本式教育》の在り方が《大いなる変容》《質的な大転換》を求められているのではないかとの思いが強くなってきています。

◆　教育の　《質の転換》という概念に含まれる要素は，考え方（理念），手立て・方策・手法，目的設定の仕方などの根幹的な事柄が比較的短い時間の間に大きく変容することだと思っていますが，そうした短期間での教育の在り方の《質の転換》は，教育の内在的なことから生じることは考えにくく，教育制度・教育行政とそれを取り巻く社会環境や国の政策によって，変容を迫られることになるのが現実だと思っています。

◆　では，実際に学校現場で教育に関わっている人は，こうした局面を，どのように捉えて，どのような考え方整理をしていくことが大事になるのでしょうか。

《従来の教育》

◆　江戸時代の大都市だけでなく農村までを含めた当時の日本社会の《教育力》の水準の高さは，明治以降の近代国家の義務教育制度に引き継がれ，勤勉な国民性とも一体化して短期間での近代化の原動力の一つとなり，戦後においても高度経済成長を支えた大きな要因の一つになったと思っています。

◆　戦後に確立した国民皆教育の徹底は，学校教育制度的には全国同一教材・集団教育を基軸に，学歴志向・入試の競争原理と重なって，学力や学ぶ力を《知識の集積》ということに集約させていたことに大きな特徴があると思っています。「客観テスト」と呼ばれる性格が求められ，1点刻みの採点・評価の厳密性が求められ，集団の中で競い合うことで「集団の中に位置付くこと」と「違いを目立たたせずに，周りの人に負けまいとする心・態度」に大きな価値が置かれてきたように思っています。

◆　こうしたことを背景にしながら多くの高校現場では，人格の形成に資するという大きな理念を意識しつつも，「生徒の進路希望の実現」を目指して，有名大学等への進学実績を高めるべく授業以外の補習の実施やテストの多用，個別指導の充実，更には部活指導に《生き甲斐を見出す》など，「教師労力の膨大量」を前提とした取組に邁進しながらも，いじめや問題行動の多発，そして集団生活になじめない生徒への対応などに追われてきた状況があると思っています。

《これからの教育》

◆　世界的にも国内的にも《多様性・多様な価値観》に重きが大きく置かれるようになりつつあり，同時に，まさに先行き不透明な状況が続く中で，これからの数年間が今後の高校教育の在り方に大きな影響を与える数年間になる可能性が高いと思っています。まさに高校現場における教育の《質的大転換》の局面だと思っています。この高校教育の《質的大転換》の要因は直接的には次の事柄がこれからの数年の間に重なり合うことだと思っています。

Society 5.0への対応準備

ICTの活用

働き方改革の徹底

新学習指導要領の実態化

◆　従来の学習指導要領の《生きる力の育成》の基本軸を継承するものとは言

新学習指導要領の実態化

え，2022年度から実施となる新学習指導要領は，【何ができるようになるか】【何を学ぶか】【どのように学ぶか】の三本の柱を構造化した点に大きな意義があると思っています。そして，更に，【何ができるようになるか】の内容についても，〔知識・技能の習得〕〔思考力・判断力・表現力等の育成〕〔学びに向かう力・人間性等の涵養〕の三構造の組み立てに基づいて《資質能力の育成と学習評価》に力点が置かれています。こうした整理は，従来の学習指導要領とは次元の異なる《学校での学びの構造化》と言えると思いますし，この新学習指導要領の実態化は，教科や総合的な探究の時間における《資質・能力の育成と評価》に重きを置くだけでなく，学校行事や生徒会活動などの特別活動の場面や部活動の場面など，学校現場の教育活動の全てに亘って《資質・能力の育成と評価》の視点が機能するようにしていくことが教育活動の在り方・考え方そのものの《質的大転換》だと思っています。

◆　先日，大きな議論になった「大学入学共通テスト」の記述式の問題・採点を巡っては，従来的な「客観性」が声高に求められ，1点刻みの採点・評価の厳密性こそが大学入試に必要だとする考えが多数派のように語られましたが，私見では，「自らの力で考えをまとめたり，相手が理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力・判断力・表現力（文科省HP）」がこれからの時代・社会の中でより必要で重要なことは明白で，高校の教育現場で生徒に育成すべき力として一層重要性が増すことになると思っています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　◆　教員としてのやり甲斐・充実感が「掛けた労力と手応え感」にあると思ってきた多くの教員

働き方改革の徹底

にとっては，数年前まで，教科指導やその準備，週休日の部活指導等の時間概念に「勤務時間外」ということの明確性はそれほど強くなく，手当の充実を望むくらいの感覚であったと思っていますし，月に換算すると100時間程度になる人もそれなりに多くいたように思っています。

◆　令和2年1月に示された「指針」によると，「①１か月の時間外在校等時間について45時間以内　②１年間の時間外在校等時間について360時間以内」であるとされており，従来的な多くの教員の感覚だと，教材準備や小テストの採点を日々の放課後に少しやって，休日に月に2・3回部活指導に出たら，上限を気にしなければならなくなる・・という感じになろうかと思っています。

◆　私見ですが，この勤務時間の厳格化の動きは，学校の在り方・授業体制の形態的な在り方に最も大きな影響を与える可能性があると思っています。授業の7時間目枠は設けにくくなり，放課後に設けていた補習や補充指導的な対応もかなりの制約を受けることと思いますし，平日・休日のそれぞれの部活動の在り方も大きく変えることが求められていると思っています。時間割自体の変更（即ち教育課程の変更），放課後という概念自体の変更，生徒への向き合い方の手立ての変更などに加えて，会議や仕事の仕方も，従来型の仕事の仕方を維持しながら仕事の量を少なくしようとする考え方では立ち行かなくなると思っています。組織としても個人としても，仕事の仕方そのものを質的に変容させるべき局面だと思っています。まさに《量的な低減化が，質的な大転換を余儀なくさせる》状況だと思います。

◆　組織としても個人としても《働き方の質的変容》を具現化するには，リーダーとしての管理職が果たすべき役割が多くありますが，教職員個々人が自分自身とチーム・組織の仕事の進め方・在り方について強い課題意識を持って工夫改善を試みることにより，目標を明確にしつつ《質的な変容》に取り組む必要もあると思っています。

◆　これからの数年の内に，全ての生徒がタブレット等の端末機器を活用しながら，自分で情報を集

ICTの活用

め，個人の意見・考えを教室で同時的に共有し合う姿が当たり前になり，生徒が端末機器からの英語の質問に英語で答えて，その答えた内容についての評価コメントが端末機器から発せられたりすることや日本語で話した言葉が瞬時に英語や変換文章に置き換えられたりすることが普通の姿になることと思っています。また，自分の学習計画や学びの振り返りを端末機器に整理しておいて，学校でも自宅でもその内容を活用しながら，自分の学習の計画，学習の仕方，振り返りなどの蓄積データをもとに，自分で主体的に評価・検証することも可能になることと思われます。

◆　これからを生きる生徒は，自分の成長とともにICT機器への習熟が図られることと思いますが，難題は生徒ではなくICT機器に苦手意識を持っている教員の《変化対応の難しさ》にあると思っています。少し以前に，パソコンの活用が一般化し，考査問題やデータ処理などをパソコンで行う流れが一気に広まった時に，パソコンへの不慣れを声高に語ることなく定年の少し前に静かに退職された方々を見てきました。これを「自然淘汰」的な在り得る姿と捉えるか，職場で同僚からや研修システム的な《支援》がもう少し機能していたら異なる定年の迎え方ができたのではないか・・と捉えるかは大きな違いのように思います。

◆　職員室や自宅で，多少時間が掛かっても落ち着いて取り組めばパソコン類を使える教員であっても，教室で限られた時間内で端末機器を自在に活用して，生徒の意見を集約したり，知識・技能の確認トレーニングに活用したり，深い学びを促す問い掛けに活用できたりするには，格段に高いハードルがあるように思っています。が，その人たちにあってもなお，端末機器は教育の内実を高めることができるツールとして有効活用することが本来的な姿であり，学びの主体は生徒であり，教員は良き指導者でありファシリテーターであることを基本としていただきたいと願っています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　◆　教員が，いま現在で日々の業務を行う時にSociety5.0を直接意識して判

Society 5.0への対応準備

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　断することはあまり考えられないかも知れませんが，これからの社会を担う人材の育成に関わっている教員が，これからの社会について想定されている近未来的な姿をイメージすることなく教育に関わっているとすると，目指すべきもの・到達点のイメージを明確にすることなく，「ただ努力すること」のみが狭い目標・意義となってしまう《陥穽》にはまることになると思っています。Society5.0に想定されている事柄は既に実際に機能したり始まっていたりしていると思える状況の中で，人材育成の根幹的な見通しを「来るべき次の社会」の実現を担うことができるような資質・能力の育成におくことは重要な意義を持っていると思います。日々の授業の場面や生徒に語り掛ける場面で《育成すべき資質・能力》を教員がイメージできているかどうかは，とても重要なことだと思っています。

◆　Society5.0の社会像として示されているAI技術の発達は産業の在り方を変え，そのことは人の行動様式・考え方に大きな影響を与え，その時代に求められる人材像を規定することになります。科学技術の発達として長い年月をかけて実現してきた現代社会までの姿が，これからの比較的短い期間で今までにない変容を遂げることになるだろうと思われます。現在がそうした場面であることの理解は，生徒たちの前に立つ教員には必須のことだと思っています。

《イメージしておくべきこと》

◆　《新学習指導要領の実態化》　《働き方改革の徹底》　《ICTの活用》　《Society 5.0への対応準備》が重なって進行するこれからの数年間について，学校として，管理職として，教職員として，どのように向き合い，教育の推進に貢献できるかを，まとまった形で整理しイメージしておくことは大事なことだと思っています。

**◎　新しい状況としての《フレーム》を理解しておく**

◆　新学習指導要領で明示され求められていることが，自校の現場では，資質・能力の育成を目指した年間・単元授業計画の立て方，評価の在り方，指導要録への記入の在り方にどのような変化対応を求めているのかの基礎認識を明確にしておくことが基本になります。また，実際の勤務時間の枠内での教育課程の具体像，時間割の具体像を明確にすることによって，部活動の時間，「放課後」の有無・在り方なども含めた日々の実際の姿がどのようなものになるかについて，教職員全体が同じイメージ・《フレーム》理解をしておくことが根幹的な前提になります。

**◎　ICT機器の活用も含めた《生徒の資質・能力の育成》に繋がる授業の姿を明確にしておく**

◆　《授業が学びの原点》という基本認識に基づいて，「主体的・対話的で深い学び」につながる授業の実際的な姿を，自校として設定している育成すべき資質・能力を前提として教科ごとの評価観点，「総探」の評価規準を明確に定めた上での実際の年間・単元授業計画を作成してみることによって，実際の授業の姿を組み立てておくことが重要です。

◆　従来的な教師の説明に基づく「知識・技能の定着」に重きを置く方法にしがみつくことなく，生徒が「問いに対して考える場面，複数の資料等から課題を見つける場面，相互に意見・考えを共有し合う場面」などから，学ぶことの意義や学び方などを受けとめ自分のものとしていくプロセスをイメージしてみることが必要だと思っています。そうしたプロセスを通して，知識・技能の定着が図られたり，家庭学習・自習などが連動した学びに繋げていく捉え方が求められていると思っています。

**◎　新しい状況下での仕事の実際的な姿を明確にしておく**

◆　新しい工夫した授業の変容が求められているこの時期に，教員の働き方の在り方も大幅で質的変容を伴わざるを得ない形で求められる状況になってしまっていますので，そのこと自体を《前向きに受けとめる視点》が大事になります。今までとは改善方策・対応方策の次元を変えるところまでを意識して，生徒に実施する小テストの採点・集約方法の在り方の変更，定期考査の在り方・回数・内容の変更，会議や調整協議の在り方・仕方の変更，各種の委員会やプロジェクトチームの在り方の変更，更には，校務分掌自体の在り方の変更など，私見では，この局面で（肚を決めて）取り組んだら意義がより大きくなる事柄は，実にたくさんあると思っています。

◆　こうした捉え方・視点の変換は，学校の組織やシステムに留まらず，個人レベルの仕事の仕方・考え方についても見直してみる良い局面だと思っています。まさに，個人レベルでも，この数年の期間に，《良い判断を，速くできるようになる》ことに繋がる力量アップを意識的・実践的に取り組んでみることをお勧めします。「自分には無理！」とか，「自分はいっぱいいっぱいに一生懸命やっているのだから，他のヒマにしている人や仕組みを変えることをちゃんとやってほしい！」とかの視点ではなく，これも私見ですが，数年間，意識して努力・実践してみると仕事の仕方や捉え方はかなり大きく改善できるものだと思っています。

《まとめ的に》

◆　いま学校現場にいて，教育に直接的な責任を負うことを求められている管理職・教員の方々には，それぞれの立ち位置を明確にして，《広い視野と高い視点》から，この大きな変化対応が求められる状況に対して向き合っていただきたいと思っています。そのことは取りも直さず，学校の教職員が，これからの生徒に対して求められている《課題を明確にし，協働して課題解決に向けて努力することができる人材像》と重なることを求められていると思っています。教育の仕事を通して，生涯に亘って努力し続ける《大人の姿》を生徒に示し続けることができることは，格別に大事な意義だと思っています。

（令和2年11月15日）